

アフリカの人々と名付け 11

詩名をめぐる個と類の力学——

「ちなみ」の論理と「あやかり」の論理

小馬 徹

「他称」としての詩名

モシの詩名である「戦名」は、時には古老の智恵を借りるとしても、自らの意志で自身自身を名付けるものであり、この意味での「自称」であると言える〔川田順造「モシ族の命名体系」『民族学研究』43(4), 1979〕。キプシギスの詩名をモシの詩名と比較してまず気付くのは、それが「他称」だという事だ。

キプシギスの詩名は、かつて牛の略奪に成功した戦士の業績に因んで付けられた。幼い子供を持つ母親が彼を訪ねて子供の詩名を所望した。すると、勇者の妻が即興詩を創り、声高に朗唱した。この詩の冒頭の語句に、男の子ならkip-、女の子ならTap-という性接頭辞を添えたものがその子の詩名となった。

詩名・苗字と「個」化の規制

モシでは、戦功のある戦士が自らの矜持を詩に歌った。キプシギスでは、武勲詩を創るのは戦士本人ではなく、彼の妻である。また、武勲詩に因む詩名はモシでは勇者自身のものだが、キプシギスでは他人の幼い子供、しかも幾人もの子供に与えられた。

もう一つの違いは、次の点にある。モシ人は、父系氏族の或る範囲の者に共通の、始祖の「自称」である詩名に由来する苗字を持つ。一方、キプシギスは苗字を持たない。

ところで、モシの詩名は個の差異化を狙って他者を威圧し、『類』の秩序としての共同体への攻撃を孕むものである〔川田、前掲書〕。この視点を援用すれば、以上に見た

キプシギスの詩名に纏わる慣行のあり方は、共同体が個の差異化に対して一層強い抑制を課しているゆえだと解釈できるだろう。

王への収束、友人への発散

キプシギス人は、沢山の妻と子供をもつのは彼の人生が全うであり、それゆえに神に愛でられている証だと考えてきた。そして、他民族から牛を略奪して婚資の元手を作る事は、祝福された人生を歩む前提条件であった。

沢山の妻と子供をもつ事は、財産を形成し威信を発揚するだけでなく、自分の属する氏族分節の規模と勢力を拡大し、首長や王という権力を発生させる可能性に繋がっている。

だが、特定の政治的役職を認めないキプシギスの平等制社会には、その可能性を巧みに抑止する制度があった。家畜を沢山所有する者は、自分の家畜の少なくとも半数を、友人・知人に無償で貸与する義務を負った。貸し手には家畜の形式的な所有権が残るだけで、日常的にその乳と血を消費する権利は借り手に与えられた。貸し手は、貸与した家畜とその子孫の返還を自分の存命中には求める事ができなかった。男性は、このような家畜預託制度に甘んじて従う時に、初めて、一人前の大人として社会に受け入れられたのである。

名前による「個」化と「類」化

言葉の二つの機能は、対象を認知・指示する事と、類似のものを範疇化する事である。モシの詩名である「戦名」は、対象の認知・指示の作用を増す事によって強く個の差異化

を指向し、その結果、長い文章になる。

一方、キプシギスの詩名を生み出す言葉の営みは、これら二つの機能を、詩それ自体と詩名とに巧みに分離し、配分している。即ち、他民族から牛を略奪した戦士の武勲を賞揚する詩は、その「一回性の叙述」を求めて認知と指示の作用が強化され、その結果長くなる傾向がある。他方、詩名は武勲詩の冒頭の語句だけに性接頭辞を添えて作られるが、それゆえに範疇化・類化されざるを得ない。

たとえば、「穴に祈りし者」という詩名は、「穴に祈りし者よ、深みなす淵の水の穴に祈りし者」という詩から作られているが、これは、より一般的な「水に祈りし者」という詩名の異版である。キプシギスの戦士は、他民族から牛を略奪して帰館する途中で往々逆巻く流れに行く手を遮られ、水よ引いて我等を向こう岸に渡せかしと祈る経験をした。そうした経験を強調する武勲詩は、「水に祈りし者」で歌い始められ、その後に個々の状況の叙述を付加して行く。だが、個別化機能を担う詩の重要な後続部は詩名では全て割愛される。

前回取りあげた「(かれこれの)牛をもぎ取りし者」も「自分の村を見限りし者」も共に、「水に祈りし者」と同じく略奪戦の一側面を強調する常套的な冒頭句である。この場合にもまた、詩名では後続の詩句は無視されている。

詩と名前の交錯

このように、キプシギスの武勲詩は戦士とその勲功を個別化しはするものの、その作用はあくまでも詩に止まり、詩名は戦士自身の名前とはならない。しかも、武勲詩を創作して朗唱するのは、戦士自身ではなく彼の妻であり、またその朗唱は詩名を乞い求める者が訪問して来る時に限定されたのである。

他方、モシの詩名である王の「戦名」は、どこまでも個別化を指向する結果、太鼓言葉の形で動作の肉体的記憶に転化させられ、そ

のメッセージは世代を超えて伝えられる。つまり、「唯一なるもの」の扱い方を巡るこれら二つの事例の方向性は正反対なのだ。

このようにキプシギスとモシの詩名を比較すると、詩と名前とが、それが唱えられる社会の構造によっていかに異なる仕方で交差し合い、また分離され、或いは統合されるかを論理的に考察する糸口が見えて来そうだ。

「ちなみ」と「あやかり」

川田のモシの名付けの論理についての次の指摘は、実に興味深い。つまり、モシ人の命名は全般的に「ちなみの論理」に基づいていて、日本などに多い「あやかりの論理」がほとんど見られない。言い換えれば、モシの名付けは、「隠喩的性格より換喩的性格が強い」と言うのである〔川田、前掲書〕。

この仮説は、いずれも誇らかな、キプシギスとモシの詩名を比較する上でも有効だ。

モシの「戦名」は、(特に王の)唯一なる者としての個的な存在をどこまでも追求している。それは、無論、「あやかり」を完全に排除しようとする論理によって貫かれる。

一方、キプシギスの詩名は、「あやかり」の論理に従って幼い子供たちに与えられた。詩名が求められる時に創作される即興詩は、戦士の武勲に「ちなみ」、その唯一性を誇らかに歌おうとする。一方、詩名は武勲詩に「ちなみ」ながらもその作法のゆえに必ず類型化に陥る。つまり、「唯一なる者」として神たらんとする戦士の「ちなみ」の論理による武勲詩は、詩名の「あやかり」の論理によって即座に中和され、類型的な名前を持つ他の人々の唯中へと発散させられるのである。母親は空の瓢箪を携えて行き、勇士から牛乳を貰うけた。彼にあやかるために。

「支配者のある社会」と「支配者なき社会」。我々がここに見るのは、二つの社会の詩と、それに因む名前のあり方である。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)